

半七捕物帳

異人の首

岡本綺堂

青空文庫

文久元年三月十七日の夕六ツ頃であった。半七が用達ようたしから帰って来て、女房のお仙と差し向いで夕飯をくつっていると、妹のお糸がたずねて来た。お糸は文字房という常磐津の師匠で、母と共に外神田の明神下に暮らしていることはすでに紹介した。

「いい陽気になりました」と、お糸はまだ白い歯をみせて笑いながら会釈えしゃくした。「姉さん。今年はまだお花見に行つて……」

「いいえ、どこへも……」と、お仙も笑いながら答えた。「なにしろ、内の人が忙がしいもんだから、あたしもやつぱり出る暇がなくなつてね」

「兄さんもまだ……」

「この御時節に、のんきなお花見なんぞしていられるものか。からだが二つあつても足りねえくらいだ」と、半七は云つた。「お花見の手拭きや日傘をかつぎ込んで来て、ことは御免だよ」

「あら、気が早い。そんなことで来たんじゃないのよ」と、お糸は少しまじめになった。

「兄さん、ゆうべの末広町すえひろちようの一件をもう知っているの」

「末広町……。なんだ、ぼやか」

「冗談じゃあない。ぼやぐらいをわざわざ御注進に駈けつけて来るもんですか。じゃあ、やつぱり知らないのね。燈台下もと暗しとか云って自分の縄張り内のことを……」

「ゆうべのことなら、もうおれの耳にはいつている筈だが……。ほんとうに何だ」と、半七も少しまじめになつて向き直つた。

「それを話す前に、実はね、兄さん。この二十一日に飛鳥山あすかやまへお花見に行こうと思つて
いるんです。なんだか世間がそうぞうしいから、いつそ今年はお見あわせにしようかと云
つていたんですけれど、やつぱり若い衆しゆたちが納まらないので、いつもの通り押し出すこ
とになつたんです。向島はこのごろ酔つ払いの浪人の素破すっぱ拔きが多いというから、すこし
遠くつても飛鳥山の方がよからうというので、子供たちや何かで三十人ばかりは揃つたん
ですが、なるだけ一人でも多い方が景気がいいから、なんとか都合がつくなら姉さんにも
……」

「なんだ、なんだ。お花見はいけねえと初めつから云っているじゃあねえか。それよりも、
その末広町の一件というのは何だよ」

「だから、兄さん」と、お糸は甘えるように云った。

「お糸さんも如才じよさいがない」と、お仙は笑い出した。「お花見のお供と取っつけえべえか」

「姉さんばかりでなく、誰か五、六人ぐらい誘つて来て……。ね、よござんすか」

芸人には見得みえがある。とりわけて女の師匠は自分の花見の景気をつけるために、弟子以外の団体を狩り出さんとして、しきりに運動中であるらしい。彼女はその交換条件として、ある材料を兄さんのまえに提出しようというのであった。半七も笑つてうなずいた。

「よし、よし、そりやあ種次第だ。ほんとうに種がよければ、十人でも二十人でも、五十人でも百人でもきつと狩り集めてやる。まず種あかしをしろ」

「きつとですな」

念を押し置いて、お糸はこういう出来事を報告した。ゆうべ末広町の丸井という質屋へ恐ろしい押借おしがりが来たというのである。丸井はそこらでも古い暖簾のれんの店で、ゆうべ四ツ半（午後十一時）頃に表の戸をたたく者があつた。もう四ツを過ぎていたので、丸井では戸をあけなかつた。御用があるならばあしたの朝出直してくださいと内から答えると、外ではやはり叩きつづけていた。銀座の山口屋から急用で来たと言つた。山口屋は嫁よめの里さと方かたであるので、もしや急病人でも出来たのかと、店の者も思わず戸をあけると、黒い覆

面の男ふたりが無提灯ですつと這入つて来て、だしぬけに主人に逢わせると云つた。かれらは黒木綿の羽織に小倉の袴をはいて、長い刀をさしていた。この頃はやる押借りと見たので、番頭の長左衛門は度胸を据えてそれへ出て、主人は病気で宵から臥せて居りますから、御用がごぎいますならば番頭の手前に仰せ聞けくださいと挨拶すると、ふたりの侍は顔を見あわせて、きつと貴様に返事が出来るかと念を押した。その形勢がいよいよ穩かでないので、店の若い者や小僧は皆ふるえているなかで、長左衛門は主人に代つてなんでも御返答つかまつりますと立派に答えた。

度胸のいい返事に、侍どもは再び顔を見あわせていたが、やがて、その一人が重そうにかかえている白木綿の風呂敷包みを取り出して、長左衛門の眼先に置いて、これを形代かたしろとして金三百両を貸してくれ、利分は望み次第であると云つた。いよいよ押借りであるとききわめた番頭は、彼等が何を取り出すかと見てみると、その風呂敷からは血に染しみた油紙が現われた。更に油紙を取りのけると、その中から一つの生首なまくびが出たので、番頭もぎよつとした。ほかの者共はもう息も出なかつた。

それが彼等をおどろかしたのは、単に人間の首であるというばかりではなかつた。それは日本人の首とはみえなかつた。髪の毛の紅い、鬚ひげのあかい、異国人の首であるらしいこ

とを知った時に、かれらは一倍に強くおびやかされたのであった。侍どもはその生首を番頭のまえに突きつけて、これを見せたらば諄く説明するにも及ぶまい、われわれは攘夷の旗揚げをするもので、その血祭りに今夜この異人の首を刎ねたのである。迷惑でもあろうが、これを形代かたしろとして軍用金を調達してくれと云った。相手が普通の押借りであるならば、一人頭あたま五両ずつも呉れてやって、体よく追いつ返す目算であった番頭も、人間の首、殊に異人の首を眼のさきへ突きつけられて、俄かに料簡を変えなければならなくなった。

攘夷の軍用金を口実にして、物持ちの町家をあらし廻るのは此の頃の流行で、麻疹はしかと浪士は江戸の禁物きんもつであった。勿論、そのなかにはほんとうの浪士もあつたであろうが、その大多数は偽浪人にせの偽攘夷家で、質たちのわるい安御家人の次三男や、町人職人のならず者どもが、俄か作りの攘夷家に化けて、江戸市中を嚇おどしあるくのであつた。おなじ押借りのたぐいでも、攘夷のためとか御国の為とか云えば、これに勿体もったいらしい口実が出来るので、小利口な五右衛門も定九郎もみんな攘夷家に早変わりしてしまつた。しかし相手の方もだんだんその事情を知つて来たので、この頃では以前のように此の攘夷家をあまり恐れないようになつた。いわゆる攘夷家も蝙蝠安ことうもりやすや与三郎と同格に認められるようになって来た。丸井の番頭長左衛門が割合におちつき払つていたのも、やはり彼等を見縊みくびつていたから

であつた。

しかしそれが勘ちがいであつたことを、番頭も初めて発見した。かれらはいわゆる攘夷家の群れではなくて、ほんとうの攘夷家であるらしかった。彼等は口のさきで紋切り型の台詞をならべるのでは無くて、生きた証拠をたずさえて飛び込んで来たのであつた。その血祭りという異人の首は、鮮血に染みたままで油紙のうえに据えられているのであつた。度胸のいいのを自慢にしていた長左衛門も、だんだんに顔の色をかえて、何者にか押し付けられるように、その頭をおのずと下げた。もうこうなつては七分の弱味である。そのあいだ二、三度の押し問答はあつたものの、所詮しよせんかれは攘夷家の請求する三百両の半額を謹んで差し出すのほかはなかつた。侍共は渋々納得して帰つた。帰るときに、形代であるから此の首を置いてゆくと云つたが、番頭は平ひらにあやまつて頼んで、この恐ろしい質物しちもつを持つて帰ることにして貰つた。

この報告をうけ取つて、半七は溜息をついた。

「ふうむ。そりゃあ初耳だ。おれはちつとも知らなかつた。だが、丸井ではなぜそれを黙っているのかな。そういうことがあつたら、この時節柄、きつと届け出るということになつているんだが……。わからねえ奴らだな」

「それがね、兄さん」と、お糸は更に説明を加えた。「その浪人たちが引き揚げるときに、おれ達の企ては途中で洩れては一大事だから、今夜のことは決して他言するな。万一これを洩らしたら同志の者どもが押し寄せて来て、主人をはじめ一家内をみなごろしにするから然う思^そえと、さんざん嚇かして行つたんですとき。それだから丸井の家では店じゆうのものに口止めをして、誰にも話さないことにしていたんですよ」

「それをおまえが又どうして知つた」

「そりやあ神田の半七の血を分けた妹ですもの」

「ふざけるな。まじめに云え。御用のことだ」

丸井の秘密をお糸が知つてい^るにはこういうわけがあつた。丸井の店の初蔵という若い者がお糸のところへ時々遊びにくるので、お糸は飛鳥山の花見に加入のことを頼むと、初蔵は一旦承知して歸つたが、きよ^うの午過ぎになつて急に断わりに来た。かれは師匠に怨まれるのを恐れて、ゆうべの出来事をいっさい打ちあけた。何分にもこの矢先きでは店を出にくいから、かならず悪く思つてくれるなど、彼はしきりに云い訳をして歸つた。單に違約の云い訳のためならば、まさかそんな大袈裟^{おおげさ}な嘘はつくまい。これはきつとほんとうのことに相違ないとお糸は云つた。半七もそう思つた。

しかしこのことが自分の口から洩れたと知れては、自分も迷惑、初蔵も迷惑するであろうから、兄さんに如才しよさいもあるまいが、それはかならず内証にして置いてくれと、お糸は念を押して帰った。帰るときに、かれは更に念を押した。

「姉さん。二十一日にはきつとですよ。ぜび五、六人さそつてね」

二

半七は夕飯を早々にすませて、すぐに末広町の丸井の店をたずねた。丸のなかに井の字の暖簾のれんを染め出してあるので、普通に丸井と呼び慣わしているが、ほんとうは井沢屋というのである。表向きに乗り込んで詮議せんぎをしては却かえつて要領を得まいと思つたので、半七は番頭の長左衛門を表へよび出して小声で訊きいた。

「どうもゆうべは飛んだことだったね」

むかしから質屋はとかくに犯罪事件にかかり合いの多い商売であるから、丸井の番頭は半七の顔をよく識しっていた。

「もうお耳にはいりましたか」と、彼はすこし眉をよせながら云った。

「むむ、すこし聞き込んだことがある。そこで、番頭さん。あいつらのきまり文句で、これを他言すると仕返しに来るの、火をつけて焼き払うのというが、そんな心配は決してねえから、何もかも正直に云ってくれねえじゃあ困る。なまじい隠し立てをして、あとで飛んだ引き合いを食うようなことがあると、却って店の為にもならねえ」

「はい、はい、ごもつともでございます」

相手が相手であるから長左衛門も正直に申し立てるよりほかはないと覚悟したらしく、半七に対して一々明確に答えたが、事件の道筋はお糸の報告とおなじことであった。浪士は覆面をしていたので、その人相はよく判らなかつたが、どちらも三十格好の男であるらしかつた。いくらか作り声をしているらしいので、これもよくは判らなかつたが、その声こ音わねに著しい国訛りはきこえないようであつたと長左衛門は云つた。かれは持参の生首というのは確かに異人の首に相違なかつたと答えた。それは自分ばかりでなく、現にその場には手代格の若い者が三人、小僧が二人居あわせて、誰もかれも皆それを異人の首と認めたのであるから、おそらく間違いはあるまいと云つた。

「このごろ流行物はやりものの押借りかと思つて、初めは多寡たかをくくつていたのでございますが、なにしろ異人の生首なまくびをだしぬけに出されましたので、わたくしはびっくりしてしまいま

した」と、長左衛門はその恐ろしいものが今でも眼のさきに浮かんでいるように顔をしかめてささやいた。

半七は黙つて聴いていた。もう此の上に詮議もないらしいので、今夜はこれだけにして長左衛門に別れた。勿論、二度と押しかけて来るようなこともあるまいが、彼等が今夜にも万一出直して来たら、すぐに自分のところへ知らせてくれ。決して隠して置いてはならないと、くれぐれも云い聞かせて帰った。

家へ帰ると、子分の松吉が待っていて、ゆうべ深川富岡門前の近江屋おうみやという質屋へ二人づれの浪人が押借りに来て、異人の首を突きつけて攘夷の軍用金をまきあげて行つたと報告した。

「しよあのねえ奴らだ」と、半七は舌打ちした。「実は今もそれで末広町まで足を運んで来たんだ」

「じゃあ、末広町にもそんなことがあつたんですかえ」

「そつくり同じ筋書だ」

その説明を聴かされて、松吉も舌打ちした。

「まったくしようがねえ。そんなことをして方々を押し歩いていやあがる。だが、親分。

生首を持つて歩いていようじやあ、そいつらは本物でしようか」

「そうかも知れねえ」

半七はかんがえてみると、松吉は紙入れから小さい紙に包んだものを大切そうに出してみせた。それは紅い毛あかであった。

「これは近江屋の入口の土間に落ちていたのを拾つて来たんですよ」と、松吉は得意らしく説明した。「なにか手がかりになるものはねえかと、わつしも蚤取眼のみとりまなこでそこらを詮議すると、土間の隅にこんなものが一本落ちていたんです。店の掃除をするとき掃き落したんでしよう」

「むむ」と、半七はその紙を手の上に拡げて見た。「異人の首の髪の毛らしいな」

「そうです。そうです、奴らが首を持ち出して拈ひねくりまわしているうちに、一本か二本ぬけて落ちたのを誰も気がつかずにいて、けさになって小僧どもが掃き出してしまったんでしよう。どうです、何かのお役に立ちませんかね」

「いや、悪くねえ。いい見付け物だ。おめえにしちやあ大出来だ。そこで、深川へ押し込んだのはゆうべの何どきだ」

「五ツ頃だそうですよ」

「まだ宵だな。それから末広町へまわったのか。ひと晩のうちによく稼ぎやあがる」と、半七は再び舌打ちした。「なにしろ、これはおれが預かっておく」

「ほかに御用はありませんかえ」

「そうだな、まずこの髪の毛をしらべて見なけりやあならねえ。すべての段取りはそれからのことだ。あしたの午ひるごろに出直して来てくれ」

松吉を帰したあとで、半七は一本のあかい毛をいつまでも眺めていた。それがほんとうの異人の髪の毛であるか、あるいは何かの薬か絵の具で染めたものであるか、それを確かめた上でなければ、どうにも見当のつけようがなかった。

半七はあくる朝、八丁堀同心の屋敷をたずねて、神田と深川の出来事を報告した。世の中のみだれている江戸の末であるから、それがほん者の攘夷家か偽浪士か、八丁堀の役人たちにも容易に判断をくだすことが出来なかった。いずれにしても半七の意見に付いて、まずその髪の毛を鑑定させることになって、ある蘭法医のところへ送って検査させると、それは日本人の毛髪を薬剤や顔料で染めたものではないらしい。さりとて獣けものの毛でもない。おそらく異人の毛であろうという鑑定であった。

例の偽浪士がどこかの墓をあばいて、死人の首を取り出して、その髪の毛を塗りかえる

か、あるいは一種の鬘かつらをかぶせて、顔もいい加減に化粧して、異人の首らしく巧みにこしらえて、それを抱えてあるいていのではないかと半七も初めは疑っていたのであるが、果たしてほんとうの異人の毛であるとするれば、かれも更にかんがえ直さなければならなかった。しかしこの当時、江戸に在住の異人は甚だ少数である。公使領事のほかに二、三の書記官や通辞つうじがあるばかりで、アメリカは麻布の善福寺、フランスは三田の濟海寺、オランダは伊皿子の長応寺、プロシヤは赤羽の接遇所、ロシアは三田の大中寺に、公使館または領事館を置いてあるが、これらは幕府に届け出であるもので、そこに住む者の姓名もみな判っている。そのなかの一人が首を取られたとすれば、すぐにも知れる筈である。かれらの方でも黙っている筈がない。かのヒュースケンの暗討やみうちち一件をみても判ったことで、彼等からは幕府にむかつて嚴重の掛け合いを持ち込んでくるに相違ない。それが今に至るまでなんの音沙汰もないのをみれば、その首の持ち主が江戸在住のものでないことは容易に想像された。

「それじゃあ横浜はまかな」

半七は自分の意見をのべて、奉行所の許可をうけて、その月の二十一日に江戸を出発することになったので、お糸は兄嫁を花見に誘い出すどころではなかった。却かえって自分が神

田三河町の兄の家へ見送りに来なければならなくなった。横浜までわずかに七里と云つても、その頃ではやはり一種の旅であつた。

「兄さん。御機嫌よろしゅう。途中も気をつけてね」

その声をうしろに聞きながら、半七は自分の松吉をつれて朝の六ツ半（午前七時）頃に神田三河町の家を出た。ほかの子分たちも高輪^{たかなわ}まで送つて来た。この頃は毎日の晴天つづきで、綿入れの旅はもう暖か過ぎるくらいであつた。品川の海の空はうららかに晴れ渡つて、御殿山のおそい桜も散りかかつていた。

「親分。今頃の旅はようがすね」と、松吉はのんきそうに云つた。

「まったくだ。これで御用がなけりやあ猶更いいんだが、そうもいかねえ。まあ、浜見物をするつもりで出かけるんだな」

「そうですよ。わっしは是非一度行つて見たいと思つていたんですよ」

一昨年（安政六年）の六月二日に横浜の港が開かれると、すぐに海岸通り、北仲通り、本町通り、弁天通りが開かれる。野毛^{のげ}の橋が架^かけられる。あくる万延元年の四月には、太田屋新田の沼地をうずめて港^{みよぎ}崎町の遊廓が開かれる。外国の商人館^{はやり}が出来る。それからそれへと目ざましく発展するので、この頃では横浜見物も一つの流行ものになって、江戸

から一夜泊まりで見物に出かける者もなかなか多かつた。

年の若い松吉は御用の旅で横浜見物が出来るのをよろこんで、江戸をたつ時から威勢がよかつた。半七は去年も一度行つたことがあるので、まず大抵の見当はついていたが、日増しに開けてゆく新らしい港の町が一年のあいだにどう変つたかと、これも少なからぬ興味をそそられて、暮春の東海道を愉快にあるいて行つた。

その頃は高島町の埋立てもなかつたので、ふたりは先ず神奈川の宿しゆくにゆき着いて、宮の渡しから十六文の渡し船に乗つて、平野間（今の平沼）の西をまわつて、初めて横浜の土を踏んだのは、その日の夕七ツ半（午後五時）頃であつた。すぐに戸部の奉行所へ行つて、御用の探索で来たことを一応とどけて置いて、半七はそれから何処かの宿屋を探しに出ると、往来でひとりのわかい男に逢つた。

「三河町の親分じゃありませんか」と、彼はうす暗いなかで透かしながら声をかけた。

三

半七と松吉も立ちどまつた。

「やあ、三五郎か、いいところで逢った。実はどつかへ宿を取って、それからおめえのところへ行くこうと思つていたんだ」と、半七は云つた。

「そりやあ丁度ようござんした。松さんもいつも達者で結構だ。まあ、なにしろ往来で話も出来ねえ。そこらまで御案内しましょう」

三五郎は先に立つて行つた。かれは高輪の弥平という岡っ引の子分で、江戸から出しゅつ役やくの与力に付いて、去年から横浜に来ていたのであつた。江戸にいるときに半七の世話になつたこともあるので、かれは今夜久しぶりで出逢つた親分と子分を、疎略には扱わなかつた。近所の料理屋へ案内して、三五郎はなつかしそうに話し出した。

「どうも皆さんに御無沙汰をして相済みません。ところで、おまえさん達は唯の御見物ですかえ。それとも何かの御用ですかえ」

「まあ、御用半分、遊び半分よ」と、半七は何げなく云つた。「なにしろ、ここもむやみに開けてくるらしいね。江戸より面白いことがあるだろう」

「まったく急に開けて来たのと万国の人間があつまつて来るので、随分いろいろの変つた話がありますよ」

この間もロシアの水兵が二人づれで、神奈川の近在へ散歩に出て、ある百姓家で葱ねぎを見

つけて十本ほど買うことになったが、買い手も売り手も詞ことばが通じないので、手真似で対談をはじめた。売り手の方では相手が異人であるから、思うさま高く売ってやれという腹で、指を一本出してみせた。それは一分というのであった。それに対して買い手は一両の金を出した。指一本一両と思つたのである。売り手もさすがにびっくりして、それでは違つて首をふつてみせると、買い手の方ではまだ不承知だと思つたらしい。その一両をなげ出して、十本の葱を引つかかえて逃げ出した。売り手はいよいよおどろいて、違つ違つと叫びながら追つてゆくと、近所の者がそれを聞きつけて駈けあつまつて来たので、買い手はいよいよ狼狽して、一生懸命に逃げ出した。水兵のひとりには浅い溝どぶかわ川へ滑り落ちて、泥だらけになつて這いまわつて逃げた。葱十本を一両に売つて、しかも買い手が命からがら逃げてゆくなどということは、ここらでも前代未聞の椿事ちんじと噂された。

こんな話をそれからそれへと聴かされて、半七も松吉もこみ上げて来る笑いを止めることが出来なかつた。話す人も聴く人もしきりに笑いながら猪口ちよこの遣り取りをしていると、三五郎はやがて少しまじめになつて云い出した。

「だが、そんなおかしい話ばかりでなく、いろいろのうるさいこともありますよ。なにしろ異人ばかりでなく、日本でも諸国からいろいろの人間が寄りあつまつて来ていますから

ね。どうも人氣じんぎが殺伐で、喧嘩をする奴がある、悪いことをする奴がある。それにね」と、かれは更に顔をしかめた。「例の浪士という奴が異人を狙っては入り込んでくる。尤も神奈川の関門かんもんで大抵くいとめている筈なんです、どこをどうくぐるのか、やつぱり時々にまぐれ込んでくる。ほん者ばかりでなく偽者もまじってくる。こいつらが一番厄介物です。このあいだ中も攘夷の軍用金を出せなんて云って、押借りしてあるく奴がありましたね」

「そいつらはどうした。みんな引き挙げたか」と、半七は訊きいた。

「それがいけねえ」と、三五郎は頭かぶりをふった。「みんな同じ奴らしいんですがね」

かれの話によると、横浜でも去年の暮ごろから軍用金押借りの一と組が横行する。勿論、それがほん者か偽者かよくわからないが、いつでも二人づれで異人の生首なまくびを抱えてくる。それを形代かたしろに軍用金を貸せと嚇して、小さい家では三十両か五十両、大きい家では百両二百両を巻き上げて行く。被害者のうちには後の祟りを恐れてそれを秘密にしている者もある。委くわしいことは知れないが、少なくとも十五六軒はその災難に逢っているらしい。こんな奴らはこの上になにを仕出来しでかすか知れないというので、戸部の奉行所でも嚴重に探索をはじめた。三五郎も一生懸命に駆けまわっているが、どうしても彼等の足跡を見つけ

出すことが出来ない。それにはどうも弱っていると彼も溜息まじりで云った。

半七と松吉は顔を見あわせた。

「それで、おめえはその生首というのをどう思う。そこらの異人で、そんなに首を取られた奴があるのか」と、半七は又訊きいた。

「あればすぐに知れる筈ですが……」

「それじゃあ近い頃に病気で死んだ者があるか」

「それも無いそうです」と、三五郎は首をかしげていた。「それだからどうも判らねえ。わたしの鑑定じゃあ、きつとどこかの墓場あらしをして、日本の死人の首をなんとか巧くこしらえて来るんだろうと思うんですよ。嚇かされる方はふるえ上がっているから、それが異人か日本人か、碌な首実験が出来るもんですか。ねえ、そうじゃありませんか」

かれも半七の最初の鑑定とおなじ見込みを付けていたのであった。しかし今の半七はそれに耳を貸すことは出来なかった。おなじ墓場あらしでも、或いは異国人の死に首を掘り出してくるのではないかという疑いはあったが、近ごろ病死した者がないとすれば、その疑いもすぐに煙りのように消えてしまわなければならなかった。半七は薄く眼をとじてただ黙っていると、三五郎の方から云い出した。

「そこで親分。おまえさんはほんとうに遊びですかえ。ひよつとすると今の一件が江戸の方へも響いて、その様子を見とどけに来たんじゃありませんか」

「はは、さすがに眼が高けえ。実はそれだ」と、半七も正直に云った。

「いや、ありがてえ。おまえさんが来てくれりやあ千人力だ」と、三五郎は急に威勢が付いたらしかった。

「実はわたしも手古摺っているんだ。親分、後ごしょう生だからいい智恵を授けておくんなせえ」

「いい智恵と云つてもねえが、見込みをつけて江戸から乗り込んで来た以上、ただ手ぶらでも引き揚げられねえ。そこで、三五郎。近い頃にどこかの異人館で物をとられたことはねえか」

「そうですね」と、三五郎は又もや首をかしげた。「物を取られた奴は幾らもあるが、どれもみんなこつちの人間ばかりで、異人館へ押し込んだ泥坊はないようですね」

「ほかに異人館から何か訴えて来たようなことはねえか」

「別にこうというほどの事ありませんが、たしか先月だとおぼえています。イギリスのトムソンという商館から奉行所の方へこんなことを内々で頼んで来ましたよ。自分のところで使っているロイドという若い番頭が、去年の夏頃から港崎町の岩亀がんきへむやみに遊びに

行つて、ずいぶん荒っぽい金を使うらしいが、商館の方で渡す給金だけじゃあとても足りる筈がない。といつて、当人はほかにたくさんの金を持つていても思えないから、その金の出所がどうも不審だ。なにか商館の方の帳面づらを誤魔化して、抜け商あきないでもしているんじゃないかと、主人の方でもいろいろに調べているが、いずれ日本人を相手の仕事に相違ないから、そつちの奉行所の方でも内々で調べてくれと、こう云うんです。そこでわたしも探索してみると、まったくそのロイドという奴は岩亀の夕顔という女に熱くなつて、むやみに金をふり撒まいているらしいんです」

「そのロイドというのはどんな奴だ」

「なんでもイギリスのロンドンの生まれで、年は二十七だそうですが、日本語もちよいと器用に出来て、遊びつぷりも悪くないので、岩亀では評判がいいそうですよ」

三五郎は笑つていた。かれはこの問題に就いてあまり深い注意を払つてもいないらしいかつたが、半七は決してそれを聞き逃がさなかつた。

「そのロイドという奴はいつも一人で出かけるのか」

「勝蔵というボーイがいつも一緒に出かけていたようです。それが主人に知れたもんですから、勝蔵の方は二月の末に暇を出されたそうです。どうで異人館奉公するような奴です

から、なんでも江戸の食いつめ者で、こいつがロイドを案内して行って、面白い味を教えたらいいんですよ。いくら異人だつてこういう奴らにおだてられちゃあ、自然に泳ぎ出す気にもなりませんよ。罪な奴ですね」と、三五郎はやはり笑っていた。

「その勝蔵という奴はそれからどうした。やっぱりここにうろ付いているのか」

「さあ、どうですかね」

「それを早く調べてくれ。そいつにも誰か友達があるだろう。異人館をお払い箱になって、それからどうしたか。江戸へ帰ったか、こつちにいるか、よく突きとめて来てくれ。たいしてむずかしいこともあるめえ」

「あい。ようがす。なるたけ早く聞き出して来ましょう」

「しつかり頼むぜ」

ここの勘定は半七が払って、三人は料理屋の門かどを出ると、宵闇ながら夜の色は春めいて、なまあたたかい風がほろよいの顔をなでた。半七は去年泊まった上州屋へゆくことにして、ここで三五郎に別れた。

「親分。その勝蔵という奴がおかしいんですかえ」と、松吉は四、五間あるき出してから小声で訊いた。

「むむ。もうこれで大抵判った。ロイドという奴を引き挙げりやあ世話はねえんだが、異人じゃあどうも面倒だからな。まあ、いい。折角乗り込んで来た甲斐があった」と、半七は星あかりの空を仰いで笑った。

四

あくる朝、二人がまだ起きないうちに、三五郎が上州屋へたずねて来た。

「ばかに早えな。横浜はまの人間は違つたものだ」と、半七は寢床のうえに起き直つた。

「久しぶりで逢つた親分に叱言こいごを聞いちやあ詰まらねえから、大急ぎでゆうべのうちに調べあげて来ましたよ」と、三五郎は自慢らしく云つた。「その勝蔵という奴は、今月の初め頃まではこつちにぶら付いていましたが、なんでも小半月ばかり前に江戸へ帰つたそうです」

半七は胸算ひかずで日数をかぞえた。そして、江戸には勝蔵の身寄りか友達でもあるのかと訊くと、かれは江戸の深川に寅吉という友達がある。さしあたりはそれを頼って行つたらしいと、三五郎は答えた。

「寅吉なんていうのは幾らもあるが、その商売は判らねえかしら」

「そうですね。ただ寅吉とばかりで、その商売までは知っている者がねえので困りました」と、三五郎は小鬢をかいだ。

「ロイドと一緒に岩亀に入りびたっていたようじゃあ、勝蔵にも馴染なじみの女があるだろうな」と、半七は云った。

「あります、あります。小秀という女で、勝蔵の野郎も大分だいぶんのぼせていたらしいんです。

じゃあ、これから岩亀へ出張って行って、その女を調べてみましょうか。ひよつとすると、あいつの行く先を知っているかも知れません」

「いや、待て。むやみに騒いじやあいけねえ」と、半七はさえぎった。「そういうわけなら女を調べるまでもねえ。ひよつとすると、当人がまた舞い戻っているかも知れねえ。迂う闊かに手をつけて感付かれちゃあ玉なしだ。まっ昼間おれ達がどやどや押し掛けて行くのはまずい。まあ、日の暮れるまで気長に待っていて、客の振りをして岩亀へ行つて見ようじやあねえか」

「それがようがすな。ここまで漕ぎ付けりやあ、そんなに急ぐことはねえ」と、松吉も云った。

「きようはゆつくり浜見物でもして、日が暮れてから仕事にかかるんですね」

そこらをひとわたり見物して、三人は夕方に帰つて来た。

「どうします。真つ直ぐにあげりますか」と、案内者の三五郎は云つた。「岩亀は遊ばなくつてもいいんです。ただ見物だけでもさせるんですから、ともかくも見物のつもりであがつてみて、それから都合にしたらどうです」

「それもよからう。ここへ来たなら土地つ子のお指図次第だ」と、半七は笑つた。

おおもん
大門

のなかには柳と桜が栽うえてあつて、その青い影は家々のあかるい灯のまえに緩ゆるくなびいていた。その白い花は家々の騒がしい絃歌に追い立てられるようにあわただしく散つていた。三人は青い影を縫い、白い花を浴びてゆくと、まだ宵ではあるが遊蕩あそびの客と見物人が入りみだれて、押し合うような混雑であつた。

「よし原の花どきより賑やかだな」

そういう半七の袂をひいて、三五郎は俄かにささやいた。

「あ、あれ、あすこにいる奴がロイドです」

教えられてよく見ると、大きな柳の下にひとりの異人が立っていた。瘦やせがた形の彼は派手な縞柄の洋服をきて、帽子を深くかぶつて、手には細いステッキを持っていた。さし当り

どうするというわけにも行かなかつたが、ここで幸いにロイドを見つけた以上、半七はその監視を怠ることは出来なかつた。かれは三五郎と松吉に眼でしらせて、少しく混雑の群れから離れた。三人は桜のかげにたたずんで、若い異人の挙動をうかがっていた。

「そこが岩亀ですよ」と、三五郎はまた教えた。

ロイドは岩亀の店さきから二、三間距れたところに立ち暮らして、誰かを待ち合わせているらしかつた。果たして岩亀の店口から二人づれの男が出てきた。そのあとから引手茶屋の女が付いて来た。それをみると、ロイドは柳の蔭からつかつかと出て行って、立ち塞がるように二人のまえにその瘦せた姿をあらわすと、彼等はそこに立ちどまって何か小声で話し合っているらしかつたが、やがて二人は茶屋の女に別れて、ロイドと一緒にあるき出した。

「あの一人が勝蔵ですよ」

三五郎に教えられて、半七はうなずいた。かれは三五郎と松吉にささやいて、異人と二人の男とのあとを追つてゆくと、廓内かくないはいろいろ人の出盛る時刻となつて、ややもすると其の混雑のなかで相手を見うしないふうになつたが、丈たけのたかい異人を道連れにしているので、勝蔵らはその尾行者の眼から逃がれることが出来なかつた。大門を出ると、路は

だんだんに暗くなった。駕籠屋や煮売り酒屋の灯の影がまばらにつづいて、埋立て地を出はずれる頃から更に暗い田圃路たんぼみちになった。そこらでは早い蛙が一面に鳴いていた。

先に立つてゆく三人はしきりに小声で話していたが、やがてその声が高くなって、ロイドは片言かたことで云った。

「日本の人、嘘云うあります、わたくし堪忍しません」

「なにが嘘だ。さつきからあれほど云つて聞かせるのが判らねえのか」

「判りません、判りません。あなたの云うことみな嘘です」と、ロイドは激昂したように云った。

「あの品、わたくし大切です。すぐ返してください」

「返せと云つても、ここに持つていねえのは判り切っているじゃあねえか」

こういう押し問答が繰り返された後に、勝蔵はロイドを突きつけて行こうとするのを、かれは追いかけて引き戻した。ひとりの異人と二人の日本人とは狭い田圃路で格闘をはじめた。それをみて、半七は子分らに声をかけた。

「異人は打つちやつて置いて、勝蔵ともう一人の奴を取っ捉まえろ」

三五郎と松吉はすぐに駈け出して行って、有無うむを云わせずに二人の日本人を取り押えた。

ロイドはおどろいて一目散いちもくさんに逃げ去った。

これで問題は解決した。

異人の生首を引っさげて攘夷の軍用金をまきあげていた浪人組は、果たして勝蔵とその友達の寅吉であった。食いつめ者の勝蔵は江戸から横浜へ流れ込んで、トムソンの商館のボーイに雇われているうちに、日本の事情によく通じない外国人を誤魔化して、彼は少しくふところを温めたので、すぐに港崎町の廓くわがよ通いをはじめて、岩亀楼の小秀という女を相方あいかたに、身分不相応の大尽風だいじんかぜを吹かせていたが、所詮はボーイの身の上でそんな贅沢遊びが長くつづく筈はないので、かれは年の若い番頭のロイドを誘い出して、自分の遊び友達にすることを考えた。勿論、かれはその案内役で、いつさいの勘定はいつでもロイドに負担させていた。

ロイドが馴染んだのは夕顔という若いおとなしい女であった。彼はこの日本のムスメに若い魂をかきみだされて、去年の夏頃から毎晩のように通いつめたので、商館から受け取る月々の給料は勿論、本国から幾らか用意して来た金も残らず港崎町へ運んでしまった。横浜に來ている同国人のあいだにも義理のわるい負債かきが嵩んだ。それでも日本のムスメを

忘れることが出来ないの、かれは悶々の胸をかかえて苦しみ悩んでいるうちに、悪魔が彼の魂に巣くった。

彼が先ず発議したのか、あるいは勝蔵が思い付いたのか、その辺の事情は確かでないが、勝蔵はロイドの発案であると主張している。いずれにしても二人がひそかに相談の末に、この頃はやる偽攘夷家の押借りをたくらんだのである。しかし偽者の多いことは世間でも大抵知つて来たので、単に口さきで嚇したばかりでは睨みが利かないと思つて、かれらは真の攘夷家であることを証明するためと、あわせて相手を威嚇するために、異国人の生首をたずさえてゆくことを案出した。勿論、ほんとうの生首などがむやみに手に入るわけでもないのであるが、それに究^{くつきょう}竟の道具があつた。ロイドは蠟細工の大きい人形を故郷から持つて来ていた。それは上半身の胸像のようなもので、大きさは普通の人間とおなじく、髪の毛も長く植えてあつた。その蠟細工はすこぶる精巧に造られていて、ほんとうの人間のようだと勝蔵もふだんから驚嘆していたのであるが、それを今度役に立てることになつて、ロイドはその首を打ち砕いた。喉^{のど}の切り口や頬のあたりには糊^{のり}紅^{べに}をしたたかに塗つた。

こうして出来あがつた異人の首を、勝蔵がいよいよ持ち出すことになつたが、自分ひと

りでは工合がわるい。さりとしてロイドを連れてゆくことが出来ないので、かれは江戸へ行って友達の寅吉をよんで来た。寅吉は深川に住んで、おもて向きは鑄掛いかけ錠じょう前直まえしと市中を呼びあるいているが、博奕ぼくちも打つ、空巢あきす狙いもやる。こういう仕事には適當の道連れと見たので、勝蔵はひそかにその相談を持ちかけると、それは面白かろうと寅吉もすぐに同意した。かれらは覆面の偽浪士となって、去年の夏頃から横浜市中で二十余軒をあらしあるいた。その金高は千五百両を越えているのを、ロイドと三人で分配していた。トムソンの商館では勿論そんな秘密は知らなかったが、勝蔵の品行がよくないのと、彼がロイドの遊び仲間であることをさとしたので、二月の末にとうとう彼を放逐することになった。トムソンを放逐されたことはさのみ驚きはしなかったが、自分たちの仕事が度重なって、奉行所の詮議がだんだん嚴重になって来たのを勝蔵は恐れた。商館を放逐されたのも或いは奉行所から何かの注意があったのではないかと危ぶまれた。かれは寅吉と相談して、四月のはじめにひと先ず横浜を立ち退くことにしたが、その時ロイドには無断で商売道具の蠟人形を持って行ってしまったのである。江戸ではまだこの新手あらてを知るまいと思つたので、かれらはその首をかかえ出して神田や深川で例の軍用金を徴収した。そうして、ひと晩のうちには首尾よく二百五十両を稼いだので、二人はすぐに吉原へ繰り込んだが、その遊び

がどうも面白くなかった。やつぱり神奈川がいいと勝蔵が云い出すと、寅吉も同感であった。神奈川の遊びの味をわすれられない彼等は、からだのあやういのを知りながら又もや港崎町へ引つ返してくると、岩亀楼でロイドに出逢った。

ロイドはかれらの顔を見ると、すぐに蠟人形をかえしてくれと迫った。ここには持つていないと云つても、ロイドは承知しなかった。人出入りの多いところでそんなことを云い合つていて、万一人の耳にはいつたらお互いの身の破滅であるから、ともかくも表へ出てくれと勝蔵が云うと、ロイドは一と足先に出て往來に待つていた。勝蔵と寅吉もつづいて出た。三人は一緒に大門を出て暗い路をたどりながら話した。勝蔵はもう少し人形をこちらへ貸して置いてくれ、そうすれば、二、三百両の金をつけて戻すと云つたが、ロイドはそれを信用しなかった。無断で人のものを持ち出してゆくようなお前たちがその約束を実行する筈がないと彼は云つた。しかしロイドの方にも同類の弱味があるので、勝蔵は多寡をくくつて取り合わなかつた。三人のあいだに遂に同士討ちの格闘が起つた。かれらは自分たちのうしろに黒い影の付きまどつてゐるのを知らなかつた。

半七の繩にかかつて、勝蔵と寅吉は白状した。かれらも最初は強情を張つていたのであるが、舶来の人形の首——この一句に肝きもをひしがれて、もろくも一切の秘密を吐き出して

しまったのであった。

それについて、半七老人はわたしにこう語った。

「まえにも申す通り、異人の首がむやみに手に入るわけのものじゃあるまい。もしほんとうに首を取ったとすれば一大事で、とうに奉行所の耳にもはいつている筈です。だが、偽首となると髪の毛がわからない。その紅い毛は日本人の毛じゃあない。といって、けもの獣の毛でもない。もちろんとうもろこし唐蜀黍でもないと云う。そこでわたくしは舶来の人形ではないかと思ふと考えたんです。その前の年に横浜に行つて、実によく出来ている舶来の人形を見せられたことがありますから、この種はどうも横浜から出ているらしいと思つて、乗り出してみると案の通りでした。勝蔵と寅吉はなかなか強情を張っていました、わたくしが唯一言『貴様たちが商売道具につかっている舶来の人形はどこから持ち出した。あのロイドから借りて来たか』と、云いますと、奴らは蒼くなつてふるえ出して、みんなべらべらとしゃべつてしまいましたよ。ふたりは死罪になりました。ロイドは外国人ですから、うっかり手をつけるわけにも行かなかつたんですが、同類ふたりが挙げられたのを聞いて、ピストルで自殺したそうです。人形の首は深川の寅吉の家の床下に隠してあったのを探し出し

て、丸井と近江屋の番頭をよび出して見せますと、まったくそれに相違ないと申し立てました。その首は参考のために保存して置こうという意見もあつたんですが、とうとう叩き毀してしまったということですよ」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

入力：網迫

校正：藤田禎宏

2000年9月5日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

異人の首

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>